## 8.3 デカルトの戦略；哲学とはキャッチコピーのこと

スコラ哲学では, プラトンとアリストテレスが混同されてしまった. 大航海時代・新大陸発見等の新しい空気の中で, デカルトはプラトンのイデア論を刷新 (リニューアル) したかったのだと思う.

さて,

**コギト命題「我思う, ゆえに我あり」は単なるキャッチコピー**

である. もちろん, 哲学史上最高に成功したキャッチコピーなのだから, 「よくできたキャッチコピー」であることは間違いない. 以下にこれを説明する.

デカルト哲学の最重要キーワードは「我 (=一人称)」である. しかし, デカルトは,

『我』を発見した

と大声で叫んでも誰も耳を貸してくれないと考えたのだと思う. そこで, [まとめ 8.3] でも書いたように, コギト命題「我思う, ゆえに我あり」をキャッチコピーにすれば,

(A) なるほど, 「我」は存在するかも

と, 方法序説の読者が納得してくれる, とデカルトは考えたに違いない. ベーコンが「悪いイドラを排除せよ」と言っているのだから, 「疑う余地のない命題もどき」からスタートすれば一般受けするだろう. ともかく, コギト命題によって, 「デカルトの哲学」において,

(B)「我」が根源的キーワードである

ことさえ伝わればよいとデカルトは考えたに違いない. そして, 結果的にはデカルトの思惑・戦略は見事に的中した. 「我 (=心)」さえ認めさせてしまえば, 我が感じる「物」も在るに違いない. さて, 「物」と「心」があったとしても, それらの間を取り持つ「仲介者」がなければ,

- 「物一元論」と「心一元論」の二つの一元論となってしまう

したがって, 「仲介者」が必要で, それが, 「感覚器 (=身体)」である. したがって, デカルト哲学のキーワードは

(C) 「我（脳・心)」, 「身体」, 「物」

の三つである.

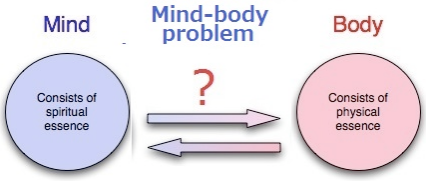
**物心二元論 (デカルト問題)**

デカルトは三つのキーワード

(D)「我（脳・心)」,「身体」,「物」

をスタートとする物心二元論という空想的言語的世界記述を想起して次のデカルト問題 ( 二元論的観念論を極めること心身問題) を提起をした

**問題 8.4. 心身問題**
「物」と「心」を繋ぐものとして,「感覚器 (=身体)」があるとして,「心」と「身体」は如何に結びつているのか？




**解答:** 解答はいたるところでのべるが, 最終的には 11.4 節でまとめて解答する.

♠ **注釈 8.4. 主客問題 (クオリア問題)**

- 私が知覚する世界は, あなたが知覚する世界と同じか？

も有名である. 量子言語の立場で言うと, この主客問題は自己言及的で, 科学的にはナンセンスな問題である.「我」は科学の対象になり得ない. もちろん,「彼が知覚する世界は, あなたが知覚する世界と同じか？」は意味を持つ. これがナンセンスだとしたら, 視力検査が意味がないことになる.

要するに,

(E) コギト命題「我思う, ゆえに我あり」は, デカルト哲学（二元論的観念論?）のキャッチコピーで, デカルト哲学の世界記述の部分は上の物心二元論

となる. コギト命題から物心二元論が導出されるわけではないが, コギト命題はキャッチコピーだから, 意味はどうでもよい, 一般に注目されればよい.

デカルトは次のように考えたかもしれない.

(F) スコラ哲学は消滅したも同然である. 哲学を蘇らすためには, 新たなモデルチェンジをしなければならない. それこそ,

物心二元論

である. これがナンセンス問題だとしても, これで, (脳科学, 人工知能が力を付ける) 400 年後まで, 哲学は安泰だ. 問題解決よりも問題提起の方が偉いのだ. プラトン流の哲学の

語り方：

$$\underset{\text{序章・方便・フィクション・前振り・看板}}{\overset{\text{世界はこうである}}{\boxed{\text{空想的言語的世界記述}}}} \xrightarrow{\text{だから}} \underset{\text{本題}}{\overset{\text{こう生きなさい}}{\boxed{\text{倫理・道徳}}}}$$

は世界記述の看板の書き換えでリニューアルできる．

事実, コギト転回：

$$\underset{\text{(プラトン)}}{\boxed{\text{イデア論}}} \xrightarrow[\text{コギト転回}]{} \underset{\text{(デカルト)}}{\boxed{\text{物心二元論}}}$$

は哲学史上最大の「モデルチェンジ」となった．

もちろん, 我々の関心は,

**このモデルチェンジ (コギト転回) は進歩か？**

である．これを次節で答える．

♠ **注釈 8.5.** デカルト哲学が二元論的観念論であるかどうかは (観念論の定義があいまいで) 一概に言えない．デカルト自身は, 実在論であると考えていたかもしれない (実体物心二元論)．ただし, 二元論的実在論などは無いわけで, 実在論だとするならば「失敗した実在論」である．これを救ったのカントであり，カントの章で述べることであるが,

$$\underset{\text{(プラトン)}}{\overset{\text{観念論}}{\boxed{\text{イデア論}}}} \xrightarrow[\text{コギト転回}]{} \underset{\text{(デカルト)}}{\overset{\text{実在論?}}{\boxed{\text{物心二元論}}}} \xrightarrow[\text{コペルニクス的転回 (観念論化)}]{\text{統合・折衷案}} \underset{\text{(カント)}}{\overset{\text{観念論}}{\boxed{\text{物心二元論・観念論}}}}$$

であり, デカルト・カント哲学は二元論的観念論である．本講では, デカルト哲学とカント哲学との区切りを曖昧にして, デカルト・カント哲学としてまとめて議論することが多い．

♠ **注釈 8.6.** 自己言及型問題 (≈ 反コペンハーゲン解釈的問題) には極めて重要なものとナンセンスなものがあって, その見極めの法則を著者は知らない． たとえば, 次も広義の自己言及型問題であるが, 多分，ナンセンス問題と考える．

($\sharp_1$) 【水槽内の脳】ある宇宙人が水槽の中に犬の脳を浮かべて, その脳の神経細胞を電極を通して刺激しているとしよう．われわれが現実に存在すると思っている世界は, 実はこのような水槽の中の脳が刺激されている仮想現実かもしれない

とか,

($\sharp_2$) クオリア問題, 心の哲学, 「私は何者なのか？」

とか,

($\sharp_3$) 神の存在証明

($\sharp_4$) 脳内時間 (=主観的時間；脳内時計を脳で感知する)

これらは文芸としては楽しめる (実験科学としての脳科学の問題とするならば,「神を信じる脳回路」とか「心 (クオリア) の脳回路」とか等は重要なテーマである)．

♠ **注釈 8.7.** 文献 [KOARA 2018; コペン] 第 6 講で述べたことであるが, 次の①–⑦は, 量子言語で記述できない命題 (反コペンハーゲン解釈的命題) と考える.

$$\begin{cases} ①: \text{ 時制—過去, 現在, 未来 —} \\ ②: \text{ ハイデガーの “世界内存在} \\ \quad \text{(In-der-Welt-sein)”} \\ ③: \text{測定の測定 (ウィグナーの友人),} \\ ④: \text{ベルグソンの主観的時間} \\ ⑤: \text{ 測定者の時間,} \\ ⑥: \text{「現在」だけが存在する (アウグスティヌス (354-430))} \\ ⑦: \text{光速度不変の原理} \end{cases}$$

等がある．ウィトゲンシュタインの言葉通り，すなわち，

($\sharp_1$)「私の言語の限界が，私の世界の限界」

($\sharp_2$)「語り得ぬことは，沈黙しなければならない」

なのだから，①–⑦の言葉を記述したければ，量子言語とは別の言語を提案しなければならない．事実，⑦を記述するためにアインシュタインは，相対性理論という言語を提案した．著者は, ①–⑥はすべて自己言及に関わると思っている.

////